扇の多義性

——四つの類型——

高橋　貴

Abstract

A fan has been used in various ways in Japan, as being given as a gift, covering a face with it, putting something on it, and symbolizing divine power. In this paper, I classified cultural meanings of the fan into four categories. First is a fan of memento which reminds of certain person or thing. It has been often exchanged between lovers at a parting and given to neighbors in some occasions as the New Year day. A boss or lord might have given it to his man and vice versa. These actions have organized or confirmed their strong social relations. Second is a fan in behavior. When someone uses a fan in certain situation, it may have several meanings. For example, covering one's face with the fan may be interpreted by another person as pretty, noble, genteel or snobbish and so on. Third is a fan with divine power. It is regarded in a ritual as a symbol of god. If someone gets it in a competitive situation of the ritual, it means good luck for him. Fourth is a fan of decoration. It may have origin in ritual, but it rather functions as decoration. It will reveal one phase of Japanese traditional culture to study the fan, but there still remain many things to study it.

1）はじめに

扇は単なるあおぐ道具ではなく，広範囲に使われ，多様な意味をもってきた。「中島宗次記」によると扇には五つの役割があるといわれる。暑いときにあおぐ，祝言に使う，お座敷でものをのせて差し出す，敵をしりぞける，天照大神を表す，である。それゆえ扇のことを五明ともいう（古事類苑 服飾部；1290)。しかし扇の役割はこれだけに留まらない。顔をかくす，表現する，飾る，遊ぶ，的にする，書画を描くなど実にさまざまである[1)]。ここでは論旨に関係させて扇の特徴を 3 点あげておこう。

第 1 は，技術である。扇は骨の製作から仕上げまで幾人もの職人の手を経てつくられる。こうした点が，安価な普及品から高価な美術品まで多様な扇を作り出した。さらに扇面がひ

とつのキャンバスとなり，絵や文字が描かれる。これが一つの扇を唯一無二のものにする。第2は，個人的な持ちものとしてどこにでも携帯できる点である。個人の所有物であり，それは個人を象徴するものになる。この点がうちわと大きく異なる。うちわは個人の所有という意識が少なく，公共的で誰でも自由に使うことができる。第3は，扇の可動性である。閉じたり開いたりすることが人間の心理と結びつき，そこにさまざまな意味を付与することが可能になった。

扇はまさに日本文化がつくりだした複雑で繊細な道具である。現在私たちが使っている扇は，かつて蝙蝠（かわほり）とよばれたもので，骨に紙を張り，折りたたむことができる。このタイプの扇は平安時代に日本で発明されたといわれ，爾来千年以上使われてきた。その間，形や機能に変化があることは自明のことである。しかし時間的なファクターを入れながら扇の社会文化的状況を考察することはここではしない。むしろ扇という道具が何なのか，その役割がどのように類型化できるのか検討する。扇そのものに焦点をあて，その本質を探ろうというわけである。

分析を進めるにあたり，コミュニケーションという概念を取り入れる。コミュニケーションとは，広辞苑によると社会生活を営む人間のあいだに行われる知覚・感情・思考の伝達をいう。人と人だけでなく，人と神などのあいだの伝達を入れてもいいし，また伝達の方向は双方向も一方向もありうる。そのとき使われるメディアはことばあるいは身振り，しぐさなどの非言語である。ことばの場合，メッセージの送り手はその意図を明確に記号化＝ことばにして相手に送る。受け取る側はそれをデコードして意味をつかむ。コード依存型コミュニケーションとよばれる所以である。この場合，メッセージが明確であるだけに，受け手がそれを正確に受け取るかどうかが問題になる。その意味でこれは送り手中心のコミュニケーションである。ことばのほかに，サイン（記号）やシグナル（信号）などもこの中に入るだろう。たとえばトイレのサインや交通信号などは，そのメッセージが誰に対しても正確に伝わる必要がある。その点，これらはユニバーサル・デザインであることが理想である。

他方，身振り，しぐさなどの非言語には明確なあるいは固定したメッセージがあるわけではない。たとえばある人がうつむいていても，病気なのか落ち込んでいるのかあるいは単にそうした姿勢をしているだけなのか，わからない。ただし目は口ほどにものをいうとのことわざどおり，ことば以上に身振り，しぐさが真実を語る場合もある。いずれにしてもそれらの意味はその場の状況から判断される。それゆえコンテクスト依存型コミュニケーションとよばれる。解釈するのは受け手側であり，受け手中心のコミュニケーションでもある（池上1984，野村1985）。

扇のコミュニケーションはこの両面を持つ。たとえば前者については日本舞踊に扇の見立てというのがある。踊るときの扇の持ち方で，刀，楽器，櫓，傘，手紙，とっくり，盆，魚など実に多くのことを表象する（花柳1981；182～183）[2)]。もちろん，こうした意味は初めか

らわかるとは限らないが，一定の学習をすれば舞踊という所作の中に具体的なメッセージを読み取ることができる。能，落語などについても同じことがいえる。しかし本論では芸事の扇については検討の対象としない。後者については扇を使うときに表れる。その姿は，本人が意図しようが，意図しまいが，周囲の人に一定の印象をもたらすことになる。

扇を使う機会は多様である。枕草子に見られる例をあげてみよう（カッコ内は日本古典文学大系のページ）。扇を預けて絵を描いてもらう（67）。扇で塵を払って掃いてすてる（69）。使いに来た者がもどりかけたとき，車から扇を差し出して呼び返す（78）。男は自分の持っている扇で女をかき寄せる（82）。探していたものがみつかり，ほっとして扇でばたばたあおぐ（103）。男たちは句を書きつけた扇をもっている（119）。愛くるしい少女が扇で顔を隠す（138）。扇で拍子をとる（142）。扇を中宮に献上する（157）。車の中にいてもみつからないか心配で扇で顔を隠す（232）。われさきに車を出そうとするのを，そんなに急がないでと扇を差し出して制す（254）。このようにさまざまな場面で扇が登場する。それは周囲に多様なイメージを送ることを意味し，清少納言は実際，自分なりの価値判断や解釈をしながら描写している。

扇についての研究書はあまり多いとはいえない。まず代表的なものは中村清兄の『扇と扇絵』であろう。扇そのものあるいは扇形をした料紙に描かれた絵について分析したもので，主として扇の芸術的な特徴に注目した。吉野裕子の「扇」には視点の新しさがある。扇は蒲葵の葉を模したもので，女性原理の聖域イビと男性原理の神木蒲葵という，沖縄の御嶽の構成が扇の原点であるとした。さらに扇のもつ性的原理を日本各地の神社祭祀でも探った。しかし扇の起源と性的原理に注目するあまり，扇の多様なあり方にもっと目が向けられなかったのは残念であった。宮島新一の「扇面画（中世編）」は示唆に富む。とくに「扇と儀礼」では神と扇，扇の贈答について事例をあげながらくわしく解説している。風俗関係では江馬務が「扇の史的研究」という論文と「扇とその礼法」という題の講演要旨を残している。前者は，「扇之記」その他古くからある歴史研究の一つである。後者では扇に多くの用途があることを指摘しているが，残念ながら具体的な事例紹介はなされていない。近年，「『扇の草紙』の研究」が上梓された。扇の草紙というのは扇絵と歌からなる作品群の総称で，著者は実例に当たりながらまとめた労作である。基本文献としては「古事類苑」がある。これは「扇」という項目で80ページにわたってまとめてあり，本論でもこれに依拠しながら文献を渉猟した。

扇は伝統技術の集大成である。素材，制作方法，装飾加工などに多くの職人がかかわっている。これが扇の特徴であり，その芸術的価値を生み出してもきた。それゆえにこれまでの研究はそうした分野に偏ってきた。そこで本論では，歴史的な変遷や芸術品ないし工芸品としての扇は取り上げない。扇がどのような状況で，どのように使われるのか，それは何を意味するのか，といったことを問題にする。メッセージ—イメージ，聖—俗という二つの座標

軸で扇を四つの類型に分けて検討する。すなわち個人のメッセージを込めた形代の扇，扇の有職故実を含むしぐさの扇，神仏や霊に関わる霊力の扇，華麗さを伝える風流の扇である（図1）。文献と民俗事例に沿いながら進めていく。

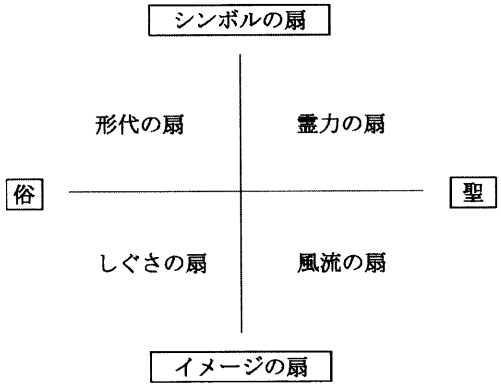

図1　扇の4類型

2）形代の扇

扇は，個人的な持ち物であることからしばしば個人を象徴する。そのため扇が人に贈られるか，交換されるときは強いメッセージを伝える。このような扇を形代の扇とよぶことにする。死や別離に使われる場合は形見の扇といいかえてもよい。また扇は人に限らず，ものやことを象徴する場合もある。日本舞踊の扇が見立てといってさまざまなものやことを表すことはすでに述べた。

では扇に強いメッセージあるいは思いが込められるのはどのような場合であろうか。まずあげられるのは男女が互いの愛情を確かめるとき，あるいは別離のときである。互いに忘れないようにと自分の分身である形代を分け与える。ついで主君と家臣のあいだの贈答もある。扇とともに主君からは恩を，家臣からは忠を贈る。師匠と弟子のあいだでの贈答もある。知人や隣人との贈答には必ずしも強いメッセージは伴わないが，それでもある種の契約や感謝の気持ちを表明することにはなる。

扇が贈られるのはまず旅立ちのときである。扇は古代には「阿布岐（あふぎ）」といったが，これが「逢う」に音通し，旅を連想させた。そこから扇は親しい人の旅立ちに際して餞別として贈られたのである。「好色万金丹」では「扇子（あふぎ）の別れ」と表現している。旅と関係する扇にはつぎのような例があげられる（文例末尾のかっこ内は書名とページ）。

a　たび枕しろき扇の月かげもなれてくやしきかたみ也けり（夫木和歌抄；247）

b　筑後守の下るに，扇やるに加へたる「あふげどもつきせぬ風はわが心ざす扇なりけり」(貫之集；254)

c　つくしへまかりける女に，月いだしたる扇を遣はすとて「都をば心を空に出でぬとも月見んたびに思ひおこせよ」(新古今和歌集；265)

d　御乳母の大輔の命婦，日向へくだるに，賜はする扇どもの中に，片つかたは日いとうららかにさしたる田舎の館などおほくして，いま片つかたは京のさるべき所にて，雨いみじう降りたるに，「あかねさす日に向ひても思ひ出でよ都は晴れぬながめすらんと」御手にて書かせ給へる，いみじうあはれなり（枕草子；263)

e　大宰帥隆家下りけるに，扇賜ふとて「涼しさはいきの松原まさるとも添ふる扇の風な忘れそ」(新古今和歌集；258)

aは「夫木和歌抄」で，「扇」という題でまとめられた18首の和歌のうちの一つである。旅と形見の扇とに慣れてきたこと，それは裏を返せば住んでいたところと親しい人から遠くなったことに対する残念な気持ちを詠んだものである。bはあおいでも尽きないこの風は私の心が贈る扇の風という意。形代としての扇の特徴がでている。cは空の月を見たら月を描いた扇を贈った私を思い出してほしいと願う，これも扇を贈った人の歌である。dは日向へ行く乳母が中宮からいくつもの扇を下賜され，そのうちのひとつの扇は表にうららかな田舎の様子，裏に雨がひどく降っている都の様子が描かれている。中宮自ら描いた絵に乳母を慕う気持ちが表れている。eは扇を贈るとき，涼しさでは生（行き先）の松原が優ろうが，この扇の風は忘れるな，と詠んだものである。

このように扇を贈られた人は旅のあいだ，扇を身につけ，ことあるごとに贈り主である妻や夫，恋人を思った（a)。また見送る人も自分の分身＝形見ともいうべき扇を託した人の身の上を案じながら，いつまでも自分のことを憶えておいてほしい，と願うのである（b，c，d，e)。

恋人のあいだで扇が取り交わされることもある。「源氏物語･花宴」を例にあげてみよう。あらすじはこうである。紫宸殿での桜の宴が終わり，少々酒に酔った源氏が藤壺に会えないものかと忍んで歩いていると，若い女性が口ずさみながらやってくる。その袖をつかまえ，抱き上げて部屋へ連れ込む。女はびっくりするが，源氏の君とわかるとほっとし，心ひかれてゆく。源氏は女の名を聞こうとするが，女はじらすように答えない。短い逢瀬を楽しむまもなく，やがて明け方になり人々が起きだしてくる。そこでのちの証拠とするために扇を取り替えて源氏は立ち去る。原典ではこの場面，「扇ばかりを，しるしに取りかえ出でたまひぬ」と表現する。「しるし」とは「二人がかたく契った証拠に」という（玉上1965;340)。深い関係になった男女が別れるときに形代として扇を交換したのである。

その後，源氏は女への思いを募らせ，扇をそばにおいてもの思いにふける。原典には「か

のしるしの扇は，桜の三重がさねにて，濃きかたに霞める月をかきて，水にうつしたる心ばへ，目なれたれど，ゆゑなつかしうもてならしたり，」とある。玉上によると，桜の三重がさねとは「桧扇の両端の親骨を三枚重ねにしてそれを桜の薄様で包んだもの」である（玉上1965；346)。半面に月，他の面に水を描いた桧扇で，あまり珍しくはないが，趣味教養が偲ばれるまで使い慣らしている。つまりこの扇は，特別に高価だったり，由緒のあるものではないが，持ち主の品性がその使い方に表れている。扇は持ち主の人格を映すものであった。

もう一つ，源氏物語の夕顔にメッセージ性の強い扇がみられる。源氏は病気になった乳母を見舞いに行ったところ，隣家に美しく花が咲いているのを目にとめた。従者に花を手折らせると，その家から童女が出てきて手招きする。香をたきしめた白い扇を差し出し，これに花を置いて差し上げてください，という。その扇には歌がしたためてあった。夕顔が別れた相手と勘違いしたために起きたハプニングと解釈されているが，これをきっかけに源氏と夕顔は恋仲になっていく……。この白い扇というのは夕顔がふだん使っているもので，香も常用のものであった（近藤2002;61)。であれば，夕顔は自分の存在をアピールするために，いいかえれば花と歌の贈り主が誰なのか相手にわからせるために扇を使ったのである。明確なメッセージが込められていたわけだが，源氏には当然，その意味はわからない。しかしそのコミュニケーション・ギャップが新しい男女の出会いをもたらすことになる。

扇にはさらに強烈な執念のような思いも込められる。契りを交わした遊女との別れに使われた，能「班女」の扇である[3)]。あらすじはつぎのとおり。吉田の少将が東国に下向する途中，美濃の野上で遊女花子と扇を交換する。それ以来，花子は扇をながめてばかりおり，仕事が手につかない。ついに花子は宿から追い出されてしまう。嘆きつつも，少将との再会を神仏に祈りながら京都にたどり着く。そこで少将と出会い，取り交わした扇を見せ合って互いの契りを確認する。

「班女」は形見としての扇が主題である。この形見という言葉はせりふの中にしばしば登場する。扇はどうしたと聞かれた花子は「憂き人の，形見の扇手に触れて，うち置きがたき袖の露」と答える。つまりこの扇は恋しい人の形見であり，とても下には置くわけにはいかないというのである。また恋しい相手とわからないときに，少将から扇を所望され，「これは人の形見なれば，身を離さで持ちたる扇なれども，形見こそ今はあだなれこれなくは忘るる隙もあらましものをと」と答える。これだけ思っているのに何ともならない，と扇をうらめしくも思っていることばである。再会を喜ぶ最後の場面では「それぞと知られ，白雪の扇のつまの形見こそ，妹背の中の情けなれ」とある。「つま」というのは，扇を開いたときの両端をいい，もちろん夫･妻であるつまとかけている。形見としての扇こそ夫婦の愛情を示すもの，というわけである。

形見としての扇は，まったく別の扱いも受ける。花子が宿の女将に追い出される場面である。女将は花子から扇を取り上げて叩きつける。「わらははこの扇を見るにつけても，身が燃

ゆるやうに腹が立つ。この扇を持ちて，どれへなりとも出て行かしめ」といい，花子の前に扇を叩きつける。扇が形見として持ち主を象徴するものであれば，愛憎ともに扇に向けられるのは自然であろう。

扇自身が旅をしてメッセージを伝える例として，民間説話「絵姿女房」がある。これは，66本の扇に女房姿を描いて全国を回覧し，これに似た女性を天皇の后にしよう，という話である。ある長者の娘がその絵姿に似ていたが，ことわったところ，無理難題を押しつけられてしまう（柳田国男集8巻：200～203）。女房絵を描いた扇とは何か。これまでの例で，扇は特定の人を思い出させるものであった。そのために月や都の様子が描かれ，香を焚きしめたりもされた。しかしここでの扇はまだ見ぬ，それゆえ架空の人物を表している。思い出という過去を指向していた扇が，ここでは未来を指向しているのである。しかし方向は異なっても，扇が人の形代である点は変わらない。

主従関係や上下関係に伴って贈られた扇もある。これには二つのタイプがある。一つは主君や主人が家来や奉公人など目下の者に与える扇である。下賜される扇ということにしよう。もう一つはその逆で，献上される扇である。つぎのような例があげられる。

f　敵を招きて打物奪取て高名せよ，勲功は取申べしとて，皆紅に月出したる扇をぞ賀古菅六に給ける（長門本平家物語；575）

g　その数百に満時，上皇まりを御袖にうけましうけまして，忠信卿にたまふ～，銀の扇八枚を召出して，上七人にわかちたまふ，御分一枚をもて，医王丸をめして是をたまふ（承元御鞠記；373）

h　御月扇と申事古しへよりありしや永享の比より改まり歟とも聞ゆ御絵所預りの家より月毎の晦日に先達て調進ある事にて尋常の妻紅の御末広のやうはさたまらずさふらふ也年の始めに下され候扇も末広なり～文月の御いはひの節御宮つかへの方々へ給りし扇はほんぼりとて十本骨にて扇の末を丸うなして作る」（扇之記；230）

i　細川殿より参御扇も。今日をのをのへまいらせられ候。面之絵は源氏うらハ雲の間くれなゐ。其上にでい絵在之。骨は十五骨くろく候（年中定例記；291）

j　公方様正月出仕之次第。～扇ハ一包又一本五本なども檀紙杉原にて包みてもすへ候。又一包と申て進上ハ十本の事にて候。いかにもうつくしく（た）たみたるうすやうのかさねたるにてつつみ。金銀の水引にてからげ候。～かなめの方を御前へなすべし（宗五大艸紙；413）

fは義経が鵯越から険しい崖を下りて平家方へ討ち入るにあたって，紅の地に月を描いた扇を道案内をしてくれた人物に与える場面である。gは蹴鞠で活躍した人たち8人に上皇から銀製の扇が贈られた。hは絵所預りの家が毎月将軍家に扇を調進し，逆に年始や文月のお

祝いには将軍から扇が家臣に贈られた[4]。ｉも同じように，細川殿が将軍にお歳暮として献上した扇が大晦日に公家や大名に下賜された，というものである。ｊは正月に将軍へ扇を献上するときの留意点である。扇は薄葉紙で美しく包み，水引をかけ，要は将軍に向けて差し上げるべきだ，という。

これらの例でわかるように，主君は家臣に扇をしばしば下賜した。その目的は，家臣の働きに応えること（ｆ），遊びの中で（ｇ），年中行事として（ｈ，ｉ）などであった。逆に家臣からも主君に扇を献上した。いずれにしても主従の絆を確認し，強化するために扇が贈られたのである。

扇は信仰と関係して贈与されることもあった。疫病がはやったとき，僧侶によって加持祈祷された扇を贈られた人の病がなおったことが「扇之記」に記されている（237）。また後述する「源平盛衰記」で那須与一が射抜いた扇であるが，これは高倉院が厳島神社へ御幸のとき奉納した30本の扇の一つであった。平家が都落ちするとき，神官より無事を祈って贈与されたものである。以下の例では扇が太田道灌の霊に捧げられた。

ｋ　人，夢に春苑，道灌静勝公を見る有り。其の面壮然として，恰も平素の如し。而して唯，扇を求め，ほぼ，世故の談に及ぶと。遂に蓮経を漸書し，便面一柄を副へ，公の影堂に寄せんと，すなわち余，扇面に題して云ふ。（梅花無尽蔵注釈；604～605）

この大意は，ある人の夢に太田道灌が現れて扇を求めた。そこで法華経を写経して扇１本をそえて道灌の影堂に納めた，というものである。このように人から神，神から人への扇の贈与が見られた。信仰に関係する贈与において，人は病気治癒，繁栄，安全を願い，あるいは霊をなぐさめ，神からは祝福がもたらされた。こうした事柄も扇が形代としての意味をもつことによる。

では，今日行われている（あるいは近年まで行われていた）習俗はどうであろうか。心情的なつながり，とくに男女の絆を表す扇といえば，結婚の習俗に似たようなものを見ることができる。結婚承諾のメッセージを送るために，つまり婚約や結納が成立した証に扇を贈るか取り交わすのである。たとえば大阪府狭山市では「扇子納め」という（日本民俗誌集成15；582）。お見合いが終わって双方合意すると，男の方から女の方に扇を渡す。これで婚約成立である。結納品として婿方からは縁起のよいかつおぶし，するめ，末広などが贈られた[5]。倉田正邦によると，「扇子納め」は大阪府一帯で行われたもようで，扇は男の方から納める場合と，双方から納める場合があったという。とくに岸和田市では扇に本人の名前と寿の字を入れた。まさに個人を象徴させたもので，形代の扇というにふさわしい（倉田他1978；170～171）。

熊本県では，婚約が決まると婿方から「茶の物」，嫁方から「戻り茶」が贈られた。両方とも茶，清酒，長熨とともに扇が含まれている。北九州市では，婿方からのものを「茶祝儀」，

嫁方からのものを「はかまもどし」とよんでいる（中村他1978；44,281）。

上下関係にともなう扇の贈与でも類似のものがある。芸事の世界における師匠と弟子である。たとえば舞妓は座敷にでるときかならず舞扇を持参する。しかしそれを自分で買うことはせずに，正月の準備を始める12月23日の「事始め」に師匠から新しい「稽古扇」をもらう。まためでたいことや舞の会があるときには「祝い扇」をもらうという（山本2001;48）。「日本永代蔵」には「能は小畠の扇を請」とあり（井原1979b；133），江戸時代から芸事の伝授の証として扇が贈られたことがわかる。

親戚，友人，隣人など対等の人間関係の中で贈られる扇もある。もっとも一般的に見られたのが，結婚披露の扇と年賀用の扇である。結婚式の当日や翌日に近隣を回って挨拶をするときに扇が贈られた。たとえば愛知県の岡崎市では式の翌日に男は扇，女は手ぬぐいをもって，組や寺を回ったという（新編岡崎市史；163）。

年賀用の扇に関して，「無事志有意」に元日未明に扇売りが現れたことが書かれている[6]。「暁がたは，「扇，扇」「宝舟，宝舟」と売声に裏住居のひとりものも目をさまし，若水汲まんと手桶さげて井戸ばたにいたれば」（江戸笑話集；453）江戸時代中ごろまでは年頭に扇を贈る習慣があり，その扇を「扇，扇」といいながら売り歩く者がいた。扇は粗末なもので，扇面には松竹梅，富士，鶴亀などが描かれていたという（江戸笑話集；577）。あまりに粗末なので「常遣ると愛想盡かしな扇也」という川柳がつくられた（川柳集；182）。正月に贈る扇はお年玉だから通用するが，ふだんに贈ったら愛想をつかされてしまう，という趣旨である[7]。

扇売りは粋な若者が多かった。喜多川歌麿の錦絵に「扇売り」というのがある。扇売りである若い男は面長で，眉も凛々しく，左肩に扇箱を数段重ねて持つ。若者は，つい気づいたように首だけ振り返り，若い女性と話している。若者の右手に持った扇には達磨和尚が描かれ，男女の仲を怪しんでいるのか横目でにらんで指をくわえている。鈴木晴信の「団扇売り」でも背負い箱に団扇をさして，横で粋なポーズをとる若者が描かれている。川柳にこんな歌がある。「扇子売負けて戻って戸をたたき」（川柳集；78）

和歌山県有田市では雑煮の膳，屠蘇の盃の後，回礼として扇を持って近親の家々を回ることが行われた（笠松1975；14）。

死者の形代としての扇もある。たとえば佐渡に立願解（りゅうがんほどき）という習俗がある。人が亡くなったとき，要を取り去った白扇，白紙で包んだ塩を青竹につけて喪家の門口に立て，後に火葬場で焼きすてるのである。別の村では，出棺のときに，白扇と塩を一升桝にのせ，「立願解」と大声でとなえ，屋根に投げ上げるという（中山1996；341）。また和歌山県では「願開き」といい，同様に扇の要をこわして屋根に放り投げ，生前に籠めた諸願を解く（笠松1975；25）。扇は死者の形代であり，それをこわすことによってこの世との縁を断ち切ることを意味するのであろう。

3）しぐさの扇

前節では形代としての扇が贈与されることによってメッセージを送ることを見た。ここでは，身振りやしぐさに関わる扇を検討する。メッセージ性ははるかに不明瞭になるが，より広く社会規範や習俗に関わるという点で，また扇の特徴がストレートに表れる点ではより重要な意味をもつ。

枕草子にはつぎのような記述がある。「暁に帰る人の～，扇ひきひろげて，ふたふたとうち使ひて，まかり申ししたる，にくしとは世の常，いとあいぎやうなし」（枕草子；103）つまり女のところに一晩泊まった男が扇をぱたぱたと使って別れの挨拶をするのはひどくかわいげがない，というのである。本来扇であおぐことには何の意味もないのだが，そこに男の軽薄さや落ち着きのなさを見ている。扇をせわしげに使うのは何か人格的な問題があるといわんばかりである。同じような例はほかにもある。たとえば漱石の「坊ちゃん」である。坊ちゃんは教師として新任早々，同僚に紹介される。そのとき画学の教師である野だいこに対して，坊ちゃんは「全く芸人風だ。べらべらした透綾の羽織を着て，扇子をぱちつかせて，御国はどちでげす，え？東京？」といった（夏目1994；31）。扇をぱちつかせる行為が人物の評価につながっている。扇は身近な道具だけに，その使い方は持ち主自身の気持ちを表しているが，それとは無関係に他人が心理を忖度する材料にもなるわけである。

このように誰かが扇の取り扱いを評価するのにはそれなりの理由がある。扇には，古来さまざまなしきたりがあった。たとえば，

l　衣冠直衣布衣之時也。持扇之時為歩行者。令懐中空手也。居座之後取出而持之。或停立。或対人立而徘徊。又取出可持之也（作法故実；354）。

m　貴人の御前へ出る時扇を腰にさして出る事は古は不礼とせず扇をつかふ事は無礼也京都将軍御代にも中比より扇をさして貴人の御前へ出るを不礼と申ならはしたる様に旧記に見えたり配膳などの時は落こぼれたる物などを扇にすへて退く事もある間配膳にはさしても不苦也（貞丈雑記；1～2）

n　主人の御座ちかき所にて～扇つかふべからず（宗五大艸紙；537）。

o　まず，士法というのは朝夕手や足を清浄にし，よく入浴してその身をいつも清潔に保つこと。毎日，早朝に結髪して，ときには月代も剃り，季節に応じた礼服を着用し，刀や脇差は無論のこと，たとえ寒中といえども腰に扇子を絶やさない（武道初心集；28）。

p　扇を手に持て出家などに礼すべからず。こしにさして手ばかりあげて礼をすべき也／扇を人に出す事。我がつかふ様に持て参り。さて出す人の前にて扇を取直し。請取人のつかふやうに出す也（今川大双紙；500）

l は衣冠，直衣を着用した場合，扇を懐中に入れて空手で歩くこと，着座後は取り出して手に持つことを作法としている。m は足利将軍家の礼儀作法を伝える伊勢流のしきたりをまとめたもの。以前は貴人の前に出て扇を使うことは無礼，腰にさすことは無礼でなかったが，あるときから腰にさすことも無礼になった。n はずばり主人の前で扇を使うことを禁じている。o も武士の心得であるが，刀脇差とともに扇も腰から離さないで客に応待すべきとする。p では扇を腰にさし，両手をあげて僧に礼をすること[8]，扇を人に出すときは要を相手側に向けるべきことが書かれている。以上の五つの例は時期も場所も異なるが，正装し，貴人や主人に面会し，客に応対し，僧にあいさつするなど人と接するとき扇の扱い方に一定の決まりのあったことが見てとれる。

扇のもち方，身体へのつけ方は，今日でも能，日本舞踊，小笠原流礼法などに明快な決まりがある。能の場合，扇は単独でもつ場合は右手でもつ，他の道具をもつときは腰にさす，腰蓑を着けたときは背中にさす，女体の役では懐中するなどの決まりがある（能・狂言Ⅳ；134～135）。日本舞踊の花柳流でも扇のもち方，構え方，お辞儀の仕方，帯への差し方，帯よりの抜き方，扇の開き方など細かく決められている（花柳1981；158～168）。小笠原流の礼法では，扇は左腰に差し，座礼をするときは右手で腰から扇を抜き，立てながら体の中央に移動し，左手を添えて前に置くという（柴崎2000；589）。暑いからといって，やたらに扇であおぐのは無作法であり，礼を失する行為であった。それゆえその行為を見た人があさましさを感じても仕方のないことであった。

ところでmには興味深いことが記されている。配膳に際して落ちたものを拾うとき扇にのせてかたづける，というのである。これは，扇の象徴的な使い方を表している。というのはものを持参したり，人に差し出したりするときは直接手でもつことをせず，扇の上に置いたのである。ものの置き方には作法があり，扇の表面しかも絵のあるところに置き，差し出すときは要の方を相手に向けるという（今川大双紙；497）。反対に裏に置き，重ければ左手を下に添える，というのもある（中島宗次記；1336）。この事例では，表にのせる方がよいが，戦のとき日輪を描いた扇の場合は畏れ多いので，裏にのせるという。扇には楊枝，瓜，松，歌などさまざまなものがのせて人に差し出された。源氏物語・夕顔にも印象的な場面があることはすでに述べた。浮世絵にも，菅原道真が扇に紙をのせて歌を詠もうとする場面などが好んで描かれている。

今日，習俗として見られるのは京都冷泉家で行われる七夕の祝い「乞巧奠」の歌会である。天の川に見たてた白い布をはさんで男女が対峙し，歌を詠む。歌は扇の上にのせ，向かいの人に手渡される。天の川をはさんで扇と歌が往き来する，なんとも優雅な歌会である。ものの受け渡しは小笠原流の礼法でも重視されている。「普通，ものの受け渡しは盆などを使った～盆がないときは，扇子の上にのせて受け渡しがされたのである。現在でも，金子包みを渡すときなどに扇子を使用することがある。このとき，扇子の要を武器の切っ先と考え，要が

相手に直接向かないように少し斜めにして渡すように注意する。また，自分の持っている扇子を相手に渡す際，相手がそれを身につけるのか，それとも風を起こすために使用するのかで，渡し方も異なってくる。」（小笠原1999；45～46）ものの受け渡しは人柄を表し，人間関係を円滑にする。扇はその手段であった。

古来，ひんぱんに行われた扇のしぐさとして「差し隠す」ことがある。人と接したり，見られたくないとき，扇で顔や口を差し隠すのである[9]。まず文例をあげてみよう。

q　をかしきことなど語り出でて，扇広うひろげて，口にあて笑ひ（枕草子；74）

r　なまめかしきもの～，をかしげなる童女の～，汗衫ばかり着て，卯槌・薬玉などながくつけて，勾欄のもとなどに，扇さしかくしてゐたる（枕草子；138）

s　童の十七八ばかりなるが～，右の手に（折敷を）持ちて，左の手に扇さして～，階より下りたる。下に同じやうなる童，御銚子に御酒入れて，また扇さして続きて，庭の雪にならびて参りて（十訓抄；290）

t　女房の車をあしくやりて打ち返したることありけり。～おのおの，心も失せて，あるにもあらぬ気色なるに，美作といふ人の，衣着ながら落て，扇をさしかくして，いみじげに居たるだにあさましきに（十訓抄；103）

u　京童部は，高兵太と云て咲しぞかし，其を恥しとや思給けん，扇にて顔を隠し，骨の中より鼻を出して，閑道を通給しかば，又童部が先を切て，高兵太殿が扇にて鼻を挟たるぞやとて，後には鼻兵太鼻兵太とこそいはれ給し（源平盛衰記；174）

v　車のかたにいささかも見おこせ給へば，下簾ひきふたぎて，透影もやと扇をさしかくすに～。かしこき陰とささげたる扇をさへとり給へるに（枕草子；232）

w　かざえ扇は何しのぶかし（好色一代男；135）

qは蔵人という職を退職した人つまり男性老人が私的な催しの場で，長く会わなかった人と立ち話をしている光景である。扇を大きく広げて口にあてて笑っている。これは近くで人と話をするときのマナーであった。こうしたマナーは，現在でも人前で笑うときやあくびをするときに手で口をおおうしぐさに表れている。rは愛らしげな少女が勾欄の下にいて，扇で顔を隠して座っている。その姿が優雅だ，というのである。sは雪の降り積もった夜，白川院が遊覧したとき，気を利かせて童女が酒や杯を持ってきた。ここにも扇をかざす優雅な童女がいる。この場面は冬の深夜であり，扇をかざすのは暑さや日照とは関係のないことがわかる。tは牛車がひっくり返り，女房たちがそこからころがり落ちたところである。けがをする者あり，一同呆然としていたが，美作という女房は扇で顔を隠し，上品めかして気取っていたという。本人も気が動転し，その様子を見せないように扇をかざしたのかもしれない。しかし周囲からは「あさましい」と評価された。uは高兵太と子供に笑われたため，扇で顔

を隠して歩くと，扇の骨で鼻をはさんだとまた悪口をいわれる。ｖは牛車の中にいるのに，透けて外から見えるかもしれないと，扇で顔を隠す。この場合，扇をかざすのは自分が誰なのか，相手からわからないようにするためであった。常識的に考えれば車の中は外から見えないはずである。しかも相手からの距離も遠いのでなおさらである。そのことは当人である女房も当然知っている。にもかかわらず，扇で差し隠したのはつい隠れてしまったということであろう。宮仕えに慣れていない女性の心理を表している。したがって扇で差し隠すという行為は女性らしさの表現の場合もあれば，このように物理的に隠れる意味もあった。後半の，ちょうどよい陰になった扇まで取り上げられた（ので）袖を顔に押し当てた，という部分は顔を隠すという行為が示されている。ｗは，神主の子や浪人がざわめきながら扇をかざし，顔を隠しているのはなぜだろう，という意味である。そこは奈良の有名な遊廓で，扇をかざすのはお忍びでやってきた男たちのしぐさであった。「女殺油地獄」にも「扇で忍ぶ茶屋の客」（近松1975；559）ということばがある。

「差し隠す」というしぐさは本来，日よけの目的があったかもしれないが，これらの例でみる限り，まったく別の意味をもつ。むしろ人と接するときの身だしなみというべきか，慎み深くするとき，恥ずかしいとき，素性を知られたくないとき，上品めかすときなどに顔や口元を扇でおおう。このようにしぐさの送り手側の意味は多様である。問題はそれを人がどう受け取るかである。しぐさの解釈はさらに多様で複雑になりうる。送り手と受け手のギャップを正確に分析する資料はないが，それでもｓやｔにその可能性のあることは指摘した。ともかくも受け手側の印象としては愛らしい，こっけい，気の毒，いやらしいといったことがあげられる。

しかし「枕草子絵巻」の「淑景舎中宮を訪問」の場面をみると，扇で差し隠すのはもっと一般的というか自然な行為と見られないこともない。そこには５人の女性と１人の男性が描かれている。男性は関白道隆で，その横に妻貴子，その前に娘の東宮妃原子と中宮定子が座る。かれらは高貴な人たちであるが，身内だけのリラックスした状況にいる。しかし女性3人はいずれも檜扇をかざしている。すでに嫁いだ娘と親であり，礼儀が必要なのか。道隆の前に置いた火桶には炭が燃えており，季節は冬であろう。したがって暑くてあおいでいるわけでもない。また廊下には童女２人が御手水の道具を運んできたが，２人ともやはり檜扇で顔を差し隠している。

扇をかざす場面はほかにもいろいろなところで見ることができる。その一つが「鳥獣人物戯画」である。そこには扇がよく描かれているが，差し隠しているのは，木陰に陣取る猿が山車楽団を見ようとしている場面である。扇の骨の隙間から盗み見ている感じである。

扇の骨の間から見ることに関し，網野義彦は『異形の王権』の中で興味深いことを述べている。「扇で顔をかくし，骨の間から見るのも，まさしく一時的な覆面と考えることができる。「公界」の場で，突発的におこった出来事，突如としてその場の状況を一変させるような事件

を見なくてはならない状況に遭遇したとき，あるいはすでに予想されるそうした事態に自ら加わるさい，手に持った扇で面をかくし，人ならぬ存在に自分をかえる意味を，このしぐさは持っていたのではなかろうか。」（網野1993；112）ここで網野は一つのしぐさに関して解釈をしている。あるいはこのしぐさは，子供が泣きながら指の間からあたりの様子をうかがうように，単にこわいもの見たさの行為かもしれない。その当否はともかく，扇の使い方にはこのように多様な解釈を与える余地がある。

鳥居清長の「花見」という浮世絵もある。これには，鮫小紋の長羽織を着た幇間と粋筋の女性たちが描かれる。幇間は女性たちの後ろからついていき，照れ隠しかへつらいのためか額に扇をかざしている。また遊郭を描いた図には扇で顔を隠す男がしばしば登場する。

「かざす」扇は被り物にもなった。これは，東京・日枝神社の山王祭でみられたもので，踊り手は牡丹で飾られた二枚扇を被って踊る。もちろんこれは顔を隠すものではなく，踊り手を飾るものであった[10]。

民俗事例では，愛媛県でツブシウチという慣行があった。これは嫁入りのとき，村の若い衆が嫁の顔をめがけてキビや豆をなげつけ，花嫁は扇で顔を隠すというものである。差しかざすというより扇で避ける，といった方が正確かもしれないが，箕などを花嫁が差しかざすのと共通するのであろう（愛媛県史；337）。

4）霊力の扇

これまで二つのタイプの扇について述べてきた。形代としての扇を贈るか交換することによってメッセージを伝える扇，扇で顔を隠すなどしぐさの中で使われ，それが他者に解釈をもたらす扇である。どちらも扇が個人あるいは個人間で使われることによって一定の意味をもつ。扇は人と人とのコミュニケーションの道具であった。これに対して霊力の扇は神仏や呪的な力と関係する。人と神，霊力とのコミュニケーションである。この場合，扇はご神体や依り代になり，霊的な力をもつシンボルとなる。

霊力の扇としてまずあげられるのは熊野那智大社の扇祭であろう。一般に那智の火祭とよばれるもので，毎年7月14日に行われる。当日は12体の扇神輿が本殿前に勢ぞろいする（図2）。1体の扇神輿は高さ約6mで，木枠に赤い緞子を張り，金地日の丸の扇を取り付けてある。全体で那智大滝の神を表すという。ハイライトは神輿渡御である。馬扇という大きな扇の先導で，途中火のついた大松明に清められながら御滝のところへ集合する。そこで権宮司が「扇褒め神事」を行う。ほかに那智田楽，御田植え式，田刈式などもある。

この祭りで扇はきわめて重要な役割をしている。まず視覚的な特徴からいえば，扇神輿は1体につき30本（最下段の半開きの扇を入れると32本）の扇をつけている。これは1か月の日数を表す。神輿は12体であるから扇の総数は360本，つまり1年360日を意味する。また3

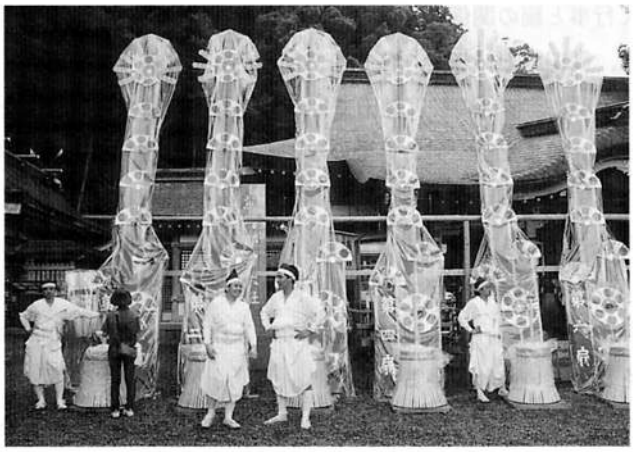

図2　那智大社の扇祭

枚扇を半円形にしたものが6組，6枚扇を円形にしたものが2組ある。6枚組で最上部にあるものには，周囲に光線状のものを取り付けて「光り」とよんでいる。これら8組の扇の中央には神鏡がある。

では扇にはどんな意味があるのだろうか。これに関し，「とはずがたり」に興味深い記述がある。作者の二条が熊野に入り，毎日写経をして供養していた。あるとき夢枕にその父親と御深草院が現れ，二条と親しく話をする。院から葉のついた白い枝二つを下賜され，目が覚めてみると檜の白い扇であった。これを聞いた那智の僧が「扇は千手観音の御体で，きっと仏のご利益があろう」といった，というものである（とはずがたり；521～524)。那智の大滝は飛瀧権現という御神体で，本地は千手観音である。つまり二条が手にした扇に神が顕現したのである。

扇祭りを開始するにあたって，本殿で熊野の神々12神に神饌を供える儀式がある。その後，降神の儀を行い，各神輿に神々が乗り移る。扇で飾られた神輿は熊野の神々の依代ということになる[11]。大滝の前で「扇褒め」が行われる。これは，「打松」とよばれる桧の扇ようのもので神文を書きながら神輿の第8の鏡を打つ。各神輿の神霊を振るい起こす意味があるという（霊力の覚醒)。嶋津正三によると「扇は“招ぐ”に通じ，神霊の招ぎ代で～幸を招き，邪を払うもの」である（嶋津正三1998；29)。このように扇は神を表象し，幸をもたらす。神輿は本殿に戻って昇神の儀を行い，祭りは終了する。

扇祭りは，田植式，那智田楽，田刈式などの行事があり，五穀豊穣を祈る祭りでもある。扇と豊穣祈願とは結びつきが深い。「古語拾遺」にはつぎのような話がある。田に唾をかけられ，怒った御歳神が田にイナゴを放ったら苗葉はたちまちに枯れてしまった。鳥扇で田をあおぐと，苗葉はまた茂り，稲が豊かに稔った，という。扇で田をあおぐことが豊穣をもたらすのである。

そこでお田植え行事と扇の関係を見ることにしよう。「嬉遊笑覧」に「外宮御山豊宮崎御田植神事，扇持５人，御田扇といひて，凡６，７尺ばかりの扇を１本ずつ持，扇の画色々にて定まらず」とある。現在，楠部の神宮神田で行われる御田植初では，竹扇を持った10人の人びとが東西に分かれ，植えた苗をあおいでいなごを払う動作をする（神宮司庁2000：5)。神楽奉仕をする人々は中啓と御田扇を持つ。また恵比寿・大黒を描いた２本の大団扇，７本の竹骨に紙を貼った長さ３尺４寸の羽団扇も登場する。団扇合わせ，行事取り，祝入りなどの所作や舞踏を行い，最後に神職が笏で大団扇を破ると，参集の人々が競って奪い取る（神宮司庁作成「神宮神田の御祭儀」)。この破片を財布に入れておくとお金が貯まり，豊作や大漁満足のお守りにもなるといわれている。

愛知県岡崎市では，この「御田扇」を乞い請けてきて五穀豊穣を願う「扇祭」が行われている。田植え後に御田扇を神輿にのせ，村々を巡回し，虫除けを祈願する。もとは岡崎藩の６地区（手永という）でそれぞれ行っていたが，現在は堤通手永と山方手永にのみ見られる(新編岡崎市史 民俗12)。

伊勢神宮の別宮といわれる伊雑宮にも御田植祭がある（図３)。これは香取神宮，住吉大社の御田植祭とともに日本三大御田植祭として知られ，国の重要無形民俗文化財に指定されている。ここでは14ｍもある青竹に大団扇（さしば）を取り付けた忌竹が主役である。団扇には松竹梅，太陽，月，千石船が描かれている。これを御田に立て，苗取りなどの行事を行う

図３　伊雑宮の御田植祭

と，これで田を三度あおぐ。これをきっかけに，ふんどし姿をした近郷の男たちが泥田の中で竹を奪い合う。これを持ち帰り，船霊に祀れば漁獲繁栄，海上安全と信じられている。ちなみに岩田によれば，文化年間の記録には団扇でなく，日の丸扇12枚ないし9枚と記されている。

岡山県の吉備津彦神社の御田植祭に御幡献納祭という行事がある。船の帆に見立てた布に扇を何本も取り付けた御幡の行列で，神社の門のところに来ると参集者が扇を奪い合う。この扇は持ち帰って神棚にまつると商売繁盛，稲田に差すと稲に虫がつかず，五穀豊穣のまじないになるという（嶋村1933；201，同神社神官の話）。

これらの行事で，扇は貰い受けるか奪い取るものであった。那智大社の場合は有料で分けられる。いずれにしても扇が神から人へ下賜される。この扇（あるいはその一部）は，ご利益として虫除け，商売繁盛，大漁などのご利益をもたらすのである。

民俗の分野では，柳田国男が「妹の力」の中で田植えに日を招く長者の話をしている。それは，広大な水田の田植えを1日で終えなければならず，西に傾いてきた太陽を扇であおいで差し戻す，という話である。しかしそういう大それた行為は不幸な結果をもたらす。すなわち長者は火事にあったり，太陽に目がくらんで死んだり，田地が池に変わったりした（柳田国男集9巻；87～90）。これに関し，柳田は「扇と人の命」の中で，長者の田植えが遅れた理由を述べている。それは，大猿が小猿を負って通るのを人々が見ていたからだという。指揮すべき地位にいる人はそうしたことが起こらないように注意しなければならない。あわてて扇を開いて日を差し招いても詮の無いこと，といっている（柳田国男集3巻;65～69）。いずれにしても，扇には日を差し戻す力もあったのである。

霊力の扇は戦においても見ることができる。もっとも古典的な例は，源平の屋島の合戦で平氏方が掲げた扇である。これはすでに触れたように高倉院が厳島神社へ奉納し，後に平家が都落ちするとき，神官より贈与（下賜）された。「源平盛衰記」に源氏方の那須与一がその扇を弓矢で射抜く場面が美しく表現されている。

x　（与一は）十二束二伏の鏑矢を抜き出し爪やりつつ，滋藤の弓握り太なるに打ちくわせ，能引き暫し固めたり。～（矢を）兵と放つ。浦響くまでに鳴り渡り，蚊目より上一寸置てふつと射切りたりければ，蚊目は船に留まりて，扇は空に上りつつ，暫し中にひらめきて，海へ颯とぞ入りにける。（新訂源平盛衰記；260）

竿の先に扇を高く掲げた1艘の船が平氏方から漕ぎ出る。扇の傍らに立つのは，「絵に書くとも筆も及びがた」いほどの美女玉虫で，夕日に輝いて一層美しさを増している。源氏方では，緋縅の鎧を着た弱冠17歳の那須与一が宿赫白の馬にまたがり，海中に乗り入れる。源平両軍は誰もが戦のことを忘れ，玉虫，扇，那須与一の動きを注視する。この扇には神のご加

護があり，それを射抜くこと（霊力の遮断）は平氏とそれを守る神が負けることを意味する。逆に的をはずしたら平氏が勝つ。扇は戦の勝敗を占うものであった。「平家物語絵巻」でこの場面はたいへん美しく描かれている。高く掲げた日の丸扇の少し後ろに玉虫が控えて立つ。与一は馬の腹まで海に入り，矢を放つと，扇は見事に空中に舞う。鈴木春信の浮世絵では，扇の射切られた瞬間が玉虫の容貌と波の細かい描写とともに美しく描かれている。

「長篠合戦図」にも同じようなものが見られる。徳川家康の陣で，「白地に葵紋」の旗，「五」の字の四半の旗とともに金地赤丸の扇が高く掲げられている。「鳥獣人物戯画」にも扇と団扇が地面に高く立てられている。これらは二つの陣を表し，互いに何かを競っているようであるが，実際のところはよくわからない。

5）風流の扇

風流の扇というのは今日的な言い方ではイベント性の強い行事に見られる扇である。その起源は一つには貴族の女房姿に求めることができる。

まず奈良の采女祭りである。これは春日神社の別宮である采女神社の祭礼で，中秋の名月に行われる。秋の七草を扇の形にしつらえた花扇を車に乗せ，平安時代の衣装をきた人々とともに街中を練り歩く（図4）。その後，猿沢の池を管弦船で2周し，最後に花扇を水に漬けて引き回す。水から引き上げ，池のほとりの采女神社で参拝にきた女性に花扇が少しずつ配られる。これをもらった女性は良縁に恵まれるという。

「大和物語」にこの采女の故事がでている。それによると，美しい采女（天皇の食事に奉仕する女官）がいて，帝をひそかに慕っていた。一度だけ帝に召されたが，その後は忘れたのかいっさい声がかからない。それを悲観して猿沢の池に身を投げて死んだ，というものであ

図4　采女神社の采女祭

図5　車折神社の三船祭

る（大和物語；253～254）。この悲劇の伝説が采女祭に表れている。七草でつくった扇は秋の扇である。秋の扇というのは秋冷になって捨てられた扇であり，季節はずれの縁起の悪いものと考えられている。つまり帝の寵愛を失った采女の象徴であろう。これが水に浸けられると（入水の換喩的表現），水で清められた扇の価値は逆転する。「大和物語」の中で，ちょうど帝が事の次第を知ってひどく哀れに感じ，池のほとりまで御幸し，歌を詠んだように[12]。七草の一本一本は縁起のよいものになり，未婚女性に良縁をもたらす，というわけである。

さらにイベント性の強い祭が京都・車折神社の三船祭（図5）である。これは芸能関係の神社として知られ，祭りは昭和3年から始まった。場所は嵐山の大堰川である。屋形船が何艘もでて，雅な女房装束をまとった女性たちが乗り込み，ときおり船から優雅な物腰で扇を川へ流す，というものである。これを船やボートに乗った観光客が拾いあげる。この行事について，「安齋随筆」にはつぎのように書かれている。足利将軍が天龍寺にお越しになったとき童のもった扇が風にとられて飛んでいき，渡月橋より嵯峨川へ流れた。それがおもしろいといい，お供の人たちが扇を流した。それ以来将軍が御成りのときは扇流しの屏風を立てるようになった（安齋随筆 巻30；258）。この祭りで，扇は王朝時代の優雅な遊びを表象している。

ここで大きな扇に注目したい。これまでも那智大社の馬扇，采女祭の七草の扇などがあり，伊勢神宮の御田植祭でも大きな扇が見られた。風流の扇であれば見られることが前提で，見栄えをよくするために大きくするのは自然であろう。大きな扇は絵巻物にも登場する。「鳥獣人物戯画」には，猿と蛙の験競べの場面がある。蛙の修験者が6尺の大扇をもっている。風流のつくりものと説明されている。京都八坂神社の祇園祭でも大きな扇を負い，甲冑に身を固めた神人が登場する（出光美術館蔵品図録　風俗画）。大きくすることで，扇が本来もっている華麗さをいっそう際立たせることになる。

華麗な扇はどんど焼きにも現われる。「諸国図会 年中行事大成」には爆竹（とんど）之図がある（70～71）。円錐形に竹や木を立て，そこから張り出した松の枝に扇を4～5本結び

つける。火をつけると，後方で数名が扇を開いて囃すようにあおぐ。扇は飾られるとともに，火をあおるものでもあった。同書には正月15日に清涼殿で行われる左義長についての記述もある。「先清涼殿の御庭に竹を飾り，是に扇を結付，これを爆す」(90) 扇の飾り，燃え盛る火，竹のはぜる音が一体となってどんどを華麗に演出した。

藤沢1971には，越前福井のサギッチョとして絵がのせてある。太くてまっすぐな竹を立て，上に葉をかぶせて「天下泰平」と書いた幣をいくつも下げ，その下に扇15本ほどを円形に並べる[13)]。

6）まとめ

扇は夫婦，恋人など親しい人との別離に際して贈られ，あるいは交換された。贈られた人はそれを使うことによって別れた人を思いしのぶのであった。また扇は主人から家臣へ下賜され，逆に家臣から献上された。こうした贈答によって主従の関係を確認，強化することができた。結婚に際しては婿側と嫁側が扇の授受を行い，これで両者の合意が成立した。このように扇は個人のあいだで授受されることによって既存の関係を確認したり，あるいは新しい関係を成立させることになった。これは扇そのものに価値があるということではかならずしもない。源氏物語にあったように「あまり珍しくはないが，趣味教養が偲ばれるまで使い慣らしている」からこそ価値あるものなのだ。あるいは扇面に一筆したためたことに価値があるのかもしれない。ともかく夫婦や恋人のあいだで贈られ，交換される扇，主人から下賜される扇には身近に置いて使っていたものが多かったろう。その方が形代ないし形見としての意味はより大きくなる。結婚などではもちろん新品を贈るが，契約という重要な意味を担えるのは，それが個人の形代・形見と見なせるからにほかならない。

扇の多様な使い方では，ものをのせることと差し隠すことに留意した。何かを相手に渡すとき，手渡しではなく扇にのせる。それだけでなく，落ちたごみを拾うときにも扇が使われた。日本人はものを食べるとき手づかみではなく箸を使うように，扇を使って人に接したのである。だから人と話すときには扇を口にあてたり，人の目を意識する時は扇で顔を隠す。こうしたしぐさは，はずかしいとき着物の袖で顔を隠したり，笑うときに手で口を押さえる動作と関連する。つまり扇はまさしく手の延長であった。

ところで差し隠すという動作は場面に応じて意味がちがっていた。童女はたぶんもの思いをしながら扇で差し隠していたし（事例 o），牛車から転げ落ちた女房はたぶん動転した気持ちを隠すために扇で差し隠した（事例 q）。このようにしぐさの扇は人の気持ちや置かれた状況を映す鏡であった。それだけ人間の行動に深みを与えるものであったが，それは同時に人に誤解や勝手な解釈を与えるものでもあった。事例 o は愛らしい童女，事例 q は気取った女房と受け取られた。「坊ちゃん」にいたっては扇をぱちつかせることが野だいこのいやらしい

性格そのものと見なされていたのである（小説の流れからいうと，坊ちゃんのそうした見方はまちがっていなかったのであるが)。

扇は祭や行事にさかんに使われてきた。それは扇に霊力があるとみなしたからであろう。神の依代としての扇（那智大社の扇祭り)，豊穣祈願の扇（伊雑宮の御田植え祭り）である。これらは終了後，下賜（といっても購入するか奪い取る）されて人々にご利益をもたらす。このほか戦の勝敗を占う扇（那須与一の扇）もあった。扇が射落とされるかどうかで戦の勝敗が決まったのである。このように扇は，神の霊力を受けて人の幸福，豊穣，戦の結果を左右することができた。この場合，扇にはしばしば日の丸が描かれる。柳田國男の「日を招く扇」とも関係して，これが霊力の扇を明らかにする上で重要な意味をもつものと思われる。またご神体とされる扇は各地に見られ，扇の霊性とその効用は今後さらに追及すべき課題である。

風流の扇としては古代伝説を再現する扇（采女祭り)，宮廷貴族の遊びのための扇（大堰川での扇流し）を取り上げた。どちらも扇が女性装束に不可欠であることと関係する。宮廷女性の悲恋や優雅さを扇によって華麗に演出したのがこれらの行事であった。ここでのキーワードは見られる扇である。視覚的に効果あらしめるためには大きな扇が使われた。大きければ目につくし，その威力はさらに大きいと考えられても不思議はない。そこで大きな扇が祇園祭や御田植祭に登場した。たくさんの扇を豪華に並べる場合もあった。扇神輿やとんど焼きにそうした例を見ることができる。

李御寧は「扇子が日本文化のひとつの原型をあらわす」と指摘した。近年，クーラーが発達したため扇を使う機会はめっきり減ったが，それは扇の意義が低下していることをかならずしも意味しない。そもそも扇は事例kにもあったようにやたらにあおぐべきものではなかった。ぱたぱたとあおぐのは，「枕草子」や「坊ちゃん」にあったように心を見透かされてしまうことになりかねない。扇は今日でも，祭り，年中行事，通過儀礼，伝統芸能などさまざまな機会で使われているし，個人でも囲碁将棋のプロを始め，愛用している人は多い。そうした扇のあり方，使い方に古代から脈々と流れている日本文化の一端が示されていると思う。

注

1）賈萱著「うちわと扇子」(『たのしい民俗学 日本と中国』所収）によると，中国にも古くから扇があり，字や絵を描いたり人へ贈ったりもするが，日本のように多様な役割はもっていない。またヨーロッパに扇が広まったのは16世紀後半といわれる。オスカー・ワイルドの戯曲「ウインダミア夫人の扇」に見られるように，扇は上流婦人の持ち物であり，ジャポニスムやシノワズリーの象徴でもあった。

2）吉野裕子は「扇」の中で，端唄「梅にも春」の踊りを習い始めたときのことを次のように書いている。「若水を汲む，というところでは扇は釣瓶になり，上の方から両手の指でクルクルとたてにまわしておろしてくるとそれが水を汲み上げる所作となる。ついで扇は水をまく柄杓となり，やがて

酒の盃にも「おちょうし」にもなり，格子戸の隙間をあらわすことにもなる。」（吉野1970）

3）近松門左衛門の「五十年忌歌念仏」は冒頭「通ひ車は，小町があだの情にのせられ，閨の扇は，班女が親骨に堰かれ」で始まる。意味は「吉田の少将が寝間に残した扇は，班女が親方から仲をさかれるもととなり」である。班女の逸話はほかの文学でも取り上げられ，江戸時代の庶民のあいだではよく知られていた。

4）正月に扇が下賜される例は多い。「師守記」には「十日，家君入御善覚房，毎年儀也，御引出物円座十枚・扇十本～」（70）とある。「親長卿記」には「六日，雪下，自禁裏被下扇子」（134），「十一日，午後参内，依召也，被下天扇」（205）などと記されている。ここで下賜された扇を天扇とよんでいるのが興味深い。

5）御帯料，勝男節（かつおぶし），寿留女（するめ），子生婦（こんぶ），末広（すえひろ），友志良賀（ともしらが＝麻糸），家内喜多留（やなぎだる＝酒）の7品目である。これに目録と熨斗を加えた9品目が正式で，略式の場合は7品目や5品目にすることができる。品目が減っても白無地の末広はたいていリストに含まれており，扇が重要な結納品であることはまちがいない。

6）伊原西鶴の「好色一代男」巻3には，大晦日に世之介が借金取りから隠れていると「扇は扇は，おえびす，若えびす」と売る声が明け方になって聞こえてきた，とある。製作地の伊勢山内では，年始用の粗雑な扇をえびす扇とよんだ。

7）同じようなことは西鶴も書いている。長崎の例であるが，「年玉は～男は1匁に50本づつの数扇」とある（世間胸算用；443）。つまり安物の扇が年玉として配られた。

8）腰への扇のさし方もいろいろある。「雅継卿記」（古事類苑 服飾部26；1326）によると，右腰にさすことを「ふえざし」といい，後ろにさすことを「やなぐいざし」という。

9）翳（さしは）という長い柄に団扇をつけたようなものがあった。これは貴人に差しかける道具で，竹原古墳，高松塚古墳に描かれている。一条兼良は『御代始抄』で「翳といふは円座のようなる物に柄をつけてたかくさしおほふ也，これは天子の龍顔を左右なく人にみせざらんための儲也」と記している（日本のうちわ;10）。平安の女房たちが笠，被衣，袖などで顔を隠すのと，扇で差し隠すのとは同じ意味があった。

10）山王祭には踊屋台と底抜屋台が登場した。踊屋台の上とそのまわりで二枚扇の冠り物をつけた女性たちが踊った。また5枚の団扇を柄のところで結び広げた団扇笠を後頭部につけて踊る子供も見られた。

11）ある神官の話によると，12の扇神輿と12の神名は1対1の対応をしてない。扇神輿が渡御する先の那智の大滝は「飛瀧権現」と称し，現在は那智大社の別宮としてまつられている。

12）「枕草子45」にも猿沢の池に采女が身を投げたのを帝が聞いて行幸し，歌を詠んだのはすばらしい，とある。

13）左義長ないしどんど焼きにおける扇飾りについては今後の課題であるが，インターネットで検索してみた。石川県田鶴浜町では，2月13日夜に「くさだち」という行事があり，扇や色紙などの「くさ」を制作し，翌14日に孟宗竹に取り付け，町内の辻に立ててから燃やす（http://www3.town.tatsuruhama.ishikawa.jp）。また「霊力の扇」に入れるべきであろうが，静岡県富士市の鵜無ヶ淵には興味深い事例がある。どんど焼き小屋の中心に竹を立て，前年に結婚した家から式に使用した扇をもらってきて枝先に取り付ける，というのである。子孫繁栄を祈って行われた行事である（http://www.d3.dion.ne.jp）。

参考文献

浅見 和彦 校注
1997「十訓抄」『新編日本古典文学全集51』小学館

網野 義彦
1993『異形の王権』平凡社
飯田 瑞穂
2001『古語拾遺』吉川弘文館
池上 嘉彦
1984『記号論への招待』岩波新書
石上　堅
1983『日本民俗語大辞典』桜楓社
伊勢 貞丈
1993「貞丈雑記」『故実叢書２』明治図書出版
市木 武雄
1993『梅花無尽蔵注釈』続群書類従完成会
市古 貞次 他校注
1991『源平盛衰記』三弥井書店
愛媛県史編さん委員会 編
1984『愛媛県史 民俗下』愛媛県
伊勢 貞頼
1982「年中定例記」塙保己一編『群書類従第22輯』続群書類従完成会
1992「宗五大艸紙」塙保己一編『群書類従第22輯』続群書類従完成会
市島 謙吉 編
1906『平家物語 長門本』
出光美術館
1987『出光美術館蔵品図録 風俗画』平凡社
井原 西鶴
1979a「好色一代男」『日本古典文学全集38』小学館
1979b「日本永代蔵」『日本古典文学全集40』小学館
1996「世間胸算用」『新編日本古典文学全集68』小学館
今川 了俊
1982「今川大双紙」塙保己一編『群書類従第22輯』続群書類従完成会
岩田 準一
1970『鳥羽伊勢の民俗』鳥羽志摩文化研究会
江馬　務
1976『江馬務著作集』中央公論社
小笠原 敬承斎
1999『小笠原流礼法入門　美しいふるまい』淡交社
小高 敏郎 校注
1966「江戸笑話集」『日本古典文学大系100』岩波書店
加来 耕三
1989『武道初心集』教育社
笠松 彬雄
1975「紀州有田民俗誌」『日本民族誌大系４』角川書店
甘露寺 親長
2000「親長記第一」続群書類従完成会『史料纂集122』

喜多村 筠庭
1979「嬉遊笑覧４」関根正直他監修『日本随筆大成 別巻10』吉川弘文館
岐阜市歴史博物館
2001『日本のうちわ』岐阜新聞社
木村 夫美
1995『京舞妓』恒文社
紀貫之（木村 正中 校注）
1988「貫之集」『新潮日本古典集成80』新潮社
儀礼文化研究所 編
1978『諸国図会 年中行事大成』桜楓社
倉田 正邦 他
1978『近畿の祝事』明玄書房
桑田 忠親 他編
1988「川中島合戦図 長篠合戦図」『戦国合戦絵屏風集成第１巻』中央公論社
賈　　萱
1991『たのしい民俗学 日本と中国』社会評論社
小林　忠
1993「扇面画（近世編）」『日本の美術第321号』至文堂
小松 茂美 編
1987『年中行事絵巻』中央公論社
1989「枕草子絵詞」『日本絵巻大成10』中央公論社
1990「鳥獣人物戯画」『日本絵巻大成６』中央公論社
1993『平家物語絵巻11』中央公論社
近藤 富枝
2002『服装で楽しむ源氏物語』PHP 文庫
三条 実冬
1979「作法故実」塙保己一編『群書類従第７輯』続群書類従完成会
柴崎 直人
2000『小笠原流礼儀作法ハンドブック』PHP 研究所
嶋津 正三
1998「那智の火祭」加藤隆久編『熊野三山信仰事典』戎光祥出版
嶋村 知章
1933「岡山県土俗及奇習」『岡山民俗叢書５』中国民俗学会
神宮司庁
1939「豊受皇太神宮年中行事今式 巻第２」『大神宮叢書』神宮司庁
2000『神宮の稲と野菜・果物』神宮司庁
神宮司庁 蔵版
1984『古事類苑 服飾部』吉川弘文館
新編岡崎市史編集委員会 編
1984『新編岡崎市史 史料 民俗』
椙杜 穹才子 編
1995『能を彩る扇の世界』檜書店
世阿弥
1998「班女」小山弘志他校注『新編日本古典文学全集59 謡曲集２』 小学館

清少納言
1958「枕草子」池田亀鑑他校注『日本古典文学大系19』岩波書店
1974「枕草子」松尾聡他校注訳『日本古典文学全集11』小学館
大道寺 友山（加来 耕三 訳）
1996『武道初心集』教育社
立川 談洲樓
1966「無事志有意」『日本古典文学大系100 江戸笑話集』岩波書店
玉上 琢彌
1965『源氏物語評釈第2巻』角川書店
田中 喜美春，田中 恭子
1997『貫之集全釈』風間書房
近松 門左衛門
1972「五十年忌歌念仏」『日本古典文学全集43』小学館
1975「女殺油地獄」『日本古典文学全集44』小学館
中院 雅忠女
1999「とはずがたり」久保田淳校注『新編日本古典文学全集47』小学館
中原 師守
1968「師守記」藤井貞文他解題『史料纂集（第一期）』続群書類従完成会
中村 正夫 他
1978『九州の祝事』明玄書房
中山 徳太郎
1996「河崎屋物語」倉石忠彦他編『日本民俗誌集成11』三一書房
名古屋市博物館学芸課 編
1995『メトロポリタン美術館浮世絵名品展』名古屋市博物館
夏目 漱石
1994「坊ちゃん」『漱石文学全集第2巻』集英社
南波 浩 校注
1961「大和物語」『日本古典全書99』朝日新聞社
西村 蒼龍
1927「扇之記」『随筆文学選集第11』書斎社
野間 光辰 校注
1966「好色万金丹」『日本古典文学大系91』岩波書店
野村 雅一
1985『しぐさの世界』NHK ブックス 日本放送出版協会
花柳 千代
1981『日本舞踊の基礎』東京書籍
藤沢 衛彦
1971『図説日本民俗学全集4 子ども歳時記年中行事編』高橋書店
藤原 清長
1930『夫木和歌抄』国民図書
松村 博司 校注
1960「大鏡」『日本古典文学大系21』岩波書店
水原 一 校定
1995『新訂源平盛衰記』新人物往来社

峯村 文人 訳注
1995「新古今和歌集」『日本古典文学全集43』小学館
宮島 新一
1993「扇面画（中世編）」『日本の美術 第320号』至文堂
民俗学研究所
1970『綜合日本民俗語彙』平凡社
安原 真琴
2003『『扇の草子』の研究』ぺりかん社
柳田 国男
1962「桃太郎の誕生」『柳田国男集 8 』筑摩書房
1963「水曜手帳」『柳田国男集 3 』筑摩書房
1969「妹の力」『柳田国男集 9 』筑摩書房
紫式部（山岸 徳平 校注）
1958「源氏物語 1 」『日本古典文学大系14』岩波書店
山本 雅子
2001『お茶屋遊びを知っといやすか』廣済堂出版
横道 萬里雄
1993『能・狂言Ⅳ 能の構造と技法』岩波書店
吉野 裕子
1984『扇：性と古代信仰』人文書院
李 御寧
1998『「縮み」志向の日本人』講談社インターナショナル
不詳
1983「承元御鞠記」塙保己一編『群書類従第19輯』続群書類従完成会